

40代の妊婦が、妊娠26週で県立中央病院の胎児スクリーニング外来を受診。超音波検査で、胎児に生まれつきの心臓疾患「総肺静脈還流異常」が見つかった。出生直後に手術する必要があり、小児心臓病の専門施設に転院して38週で出産。生後早期に手術し、無事成功した。

医療最前線  
産み育てる  
県立中央病院から

〈174〉

は、最新の超音波検査機器で母体と胎児の状態を詳細に検査。胎児に心臓病をはじめとする先天性疾患がないか、母体に妊娠合併症のリスクはないかを確認する。

胎児心臓病は今回の症例（総肺静脈還流異常）のように、生後すぐにチアノーゼや心不全を起こし危険な状態に陥るものがあり、速やかな外科治療が必要となる。事前に発見することで

専門施設での安全な出産と治療に備えられたという。

「生まれてからの対応では手遅れになり、予後に影響する危険性がある。早期発見できる意味は大きい」と須波医師。出生前検査で胎児心臓病を発見できる割合は全国平均で約7割だが、同外来ではほぼ100%、その他の先天性疾患に

は手遅れになり、予後に影響する危険性がある。早期発見できる意味は大きい」と須波医師。出生前検査で胎児心臓病を発見できる割合は全国平均で約7割だが、同外来ではほぼ100%、その他の先天性疾患に

開設から3年。同院に通院する妊婦だけでなく、連携施設をはじめとして他院に通院する妊婦らも広く受け入れている。昨年度は、県内で出産した約5400人の3分の1以上に当たる1877人が受診。先天性心疾患や母体合併症の可能性を指摘された167人（約9%）のうち60人が同院で管理され、無事に出産したという。胎児診断を専門とする須波医師は、「リスクが指摘された場合は万全に備え、指摘がなければ安心して産める。一期一会の検査に集中し、安全なお産ができるように支えたい」と話す。

県内妊婦 3分の1超を精査

先天性疾患を早期に発見

関しても約80%と高い診断実績がある。

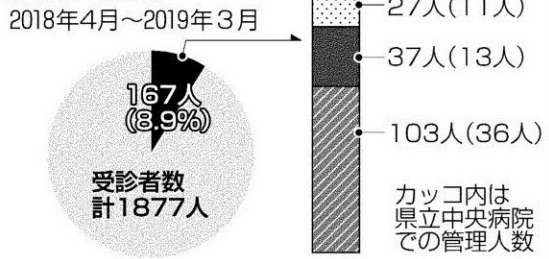
また、母体合併症の中でも妊娠高血圧症は母児の生命にかかわる重篤な疾患であり、発症前からの対応が重要だ。スクリーニング外来では、子宮動脈血流異常と特別な血液検査を組み合わせて90%以上の高い精度で発症リスクを評価する。発症リスクが高いと判断した場合、自宅での血圧測定や管理入院をしてもらいます

県立中央病院は、安心して産み、育てるために最善の医療を提供している。現場をシリーズで伝える。

Ⅱ第2、4木曜日に掲載

県立中央病院は妊娠中期の妊婦を対象に、胎児の先天性疾患の早期発見を主な目的として胎児スクリーニング外来を開設している。外来を担当する産科（周産期遺伝子診療センター長）の須波玲医師は、「生まれですぐ治療が必要な重い病やリスクを出生前に見つけることで、安全に産み、最善の治療を受ける準備ができる」と話す。

胎児スクリーニング外来での指摘症例数



- 先天性心疾患** ..... 心室中隔欠損、ファロー四徴症、総動脈管症、総肺静脈還流異常など
- 胎児疾患** ..... 口唇口蓋裂、消化管閉鎖、肺腫瘍、脊髄髄膜瘤、腎奇形など
- 母体合併症** ..... 妊娠高血圧症、切迫早産、胎盤付着部異常、羊水過多・過小など



須波玲医師